巻頭

波多野完治

「幼児の教育」とその前身である「婦人と子ども」が復刻・再刊されるとのこと、まことによろこばしい。

この雑誌は、日本の幼児教育の正統を継ぐものであって、この雑誌をみずしては、日本の幼児教育は語れない。ことに初期のおわりから中期にかけて、倉橋惣三の執筆・編集にかかるようになってからは、その水準は著しく向上し、いわば幼児教育界の「半学術雑誌」の様相を呈するにいたった。日本の幼児教育は倉橋惣三の努力によって、今日の世界に誇るべき達成をとげたのであるが、倉橋がいかにして、デュキーの考えを幼児教育の中にもちこむことを考えついたのか、またいかにして、小学校の教育では、結局日本では失敗におわる「新しい教育」を、幼児教育の世界では成功にみちびくことが出来たのか、このような事情をくわしくあとずけるには、この雑誌にあたるほかはないのである。

わたし自身、倉橋惣三の人物およびその考えに興味をもって以来、どれだけこの雑誌のおかげを蒙ったかわからない。この雑誌は多少の欠号をのぞき、お茶の水女子大学附属幼稚園の園長室にある。で、わたしは、当時園長であった及川ふみ先生におねがいして、これを読ませて頂いた。この本は、もちろん持出厳禁なのでわたしは園長室を無遠慮に占領し、安楽椅子によったり、長椅子に横になったりして、よみふけったものであった。及川先生および、その後任であった坂元彦太郎氏の特別のご好意なくしては、わたしの倉橋惣三についての知識ははなはだ貧弱であることをまぬかれなかったろう。

こういう苦労をしなければ読むことの出来なかった貴重な文献が復刻され、たやすく目がとおせるようになる、というのは、いかにもありがたいことで、「復刻刊行会」の人びとにあつく感謝申しあげる次第である。

なお別巻をつけて、戦前版の「幼児の教育」についての解説や、幼児教育に関する重要論文を集録するというのも、独創的なアイディアであって、これらを参照することにより、日本の幼児教育への理解が一層ふかまることであろう。